

〈別集〉

『和光市内の「引又道」と「道するべ」』



『和光市の「引又道」と「道するべ」』は、和光市で活動している文化財関連団体「和光市歴史と文化を学ぶ会」より、寄稿して頂きました。

歴史と文化を学ぶ会は、毎月第2月曜日に和光市南公民館で、地域の歴史と文化を学習している団体です。今回は、日ごろの研究成果を、別集として掲載する運びとなりました。ご提供頂き、誠にありがとうございました。



2017.3

和光市内の「引又道」と「道するべ」



平成 28 年 1 月 1 日

和光市歴史と文化を学ぶ会

1. まえがき

和光市内には、「引又道」と刻まれた庚申塔などの道しるべが7基あります。

現在、この「道しるべが刻まれた塔」は殆どが当時の場所になく、元の場所さえもはっきりしないものがあります。

市内には2本の引又道があったとされており、『和光市史 民俗編』（昭和58年発刊）には次のように記されています。

- ① 第一の有名な引又道は、明治年間には志木街道とも呼ばれた道である。これは川越街道から下新倉の浅久保の西端で分岐し、西北に進む道である。川越街道と分岐する三叉路の所には古くから商店があり、よい目印となっていた。
- ② もう1本の引又道は、下新倉から新倉を通り、根岸・台を経て引又（志木）に至る道である。これは現在では引又道とか志木道と呼ばれることもなく、不明な点が多い。

今回、これら道しるべが示す道筋を、明治時代の地図・江戸時代の絵図・各種資料・地元への聞き取りなどをもとに、

- 「道しるべは何処にあったのか？」
- 「引又道はどの道か？」併せて
- 「和光市から引又宿への道筋はどの道か？」

について調べたものです。

2. 引又道と道しるべ

2-1. 引又道

- (1) 「引又道」は、引又宿へ向かう際に呼ばれた名称であり、その道を逆に江戸へ向かう時には「江戸道」と呼ばれた。1本の道が行き先によって、その名称が使い分けられていた。
- (2) 『和光市史 民俗編』には次のように書かれている。

「商品の道として重要な存在であったと考えられている。引又は現在の志木のことであり、近世において重要な河岸があり、交通上の要地で、この地方の一つの中心地であった。

和光市域の人々は、白子宿でも買い物をしたが、それは主として日常的な品物であり、少しまとまったものや大きな物は引又へ買いに行ったという。」

2-2. 引又宿

- (1) 江戸時代前期に新河岸川の舟運が始まると、多数の河岸場が置かれた。引又河岸は奥州街道と新河岸川の交点に位置し、内陸部との交通に恵まれて、明暦（1655-1658）から寛文（1661-1673）にかけて、市や宿が設けられた。引又河岸の幕府公認は元禄3年（1690）、5代将軍綱吉の時代となる。

引又河岸・宿は、幕末から明治初期にかけて、最も繁栄した。

現在の志木市本町にあたる。

- (2) 十方庵敬順は『遊歴雑記』の中に、江戸時代・文化年中（1804～1818）における町の状況を次のように記している。

「引股の宿は南北の町、長さ三町（約330m）余、新宿・本宿・中宿・坂下町と次第して町幅広く、穀問屋あり、酒楼・食店・商家・旅籠屋両側に軒をつらね、辺鄙には都会の土地にして、例月三、八の日、市のたつことなん」。

2-3. 道しるべと石仏

- (1) 市内にある道しるべ7基のうち、「庚申塔」に刻まれているものが6基と大半を占めている。
- (2) 庚申塔には憤怒の形相を陽刻した「青面金剛像」と、文字塔を印刻した「庚申塔」とがある。

- (3) 庚申塔は、次のように信仰されていた。
- ① 庚申の日の夜に「三尸の虫（人の寿命を縮める悪霊）」が体から抜出して天帝に人の悪行を告げることの無いように、夜を徹して祈る信仰。
- ② 村の入り口や辻に建て、村へ入り込む悪疫や悪鬼を遮る神。従って、村の辻々に多く建てられた。
- (4) 残る1基は「石橋建立勸化仏」である。
- これは、土橋（あるいは板橋）が度々傷み、通行に困難を来していたことから、丈夫な石橋に架け替えようと、地元の人が願い、そのためには多額の費用を必要とすることから、お坊さんが多くの人々に対して仏の教えを説き、寄付を募って歩き（勸化・勸進）、その形としての「仏様」を建てたものである。
- ちなみに、塔の頂部には参拝した際に打石したことによるものとも言われている、くぼみ（盃状穴）が多数見られる。

3. 道しるべ一覧

道しるべの形態、建立年月・西暦、現所在地・地番、道しるべ内容は下表の通りとなる。
また、一覧図を次ページに示す。

道しるべ一覧

①	庚申塔（青面金剛像）	安永 元年 12月 （1722）
	和光市白子2-18-12	右 ひきまた かわご江 道
	牛房・観音寺	左 □□□□ ところさわ □
②	石橋建立勸化仏（文字塔）	明和 5年 5月 （1768）
	和光市下新倉4-19-45	左リ川にへ右引また道
	西本村・壹鑑寺	
③	庚申塔（文字塔）	慶応 2年 6月 （1866）
	和光市中央1-1-55	引又道
	丸山台・柳下家	川越道
④	庚申塔（青面金剛像）	嘉永 6年 7月 （1853）
	和光市新倉1-14	右 引又道
	漆台・滝不動前	左 大山道
⑤	庚申塔（青面金剛像）	天明 8年 3月 （1788）
	和光市下新倉5-5-1	右引又ミち
	嶋・柳下家（屋号：長島）	
⑥	庚申塔（青面金剛像）	宝暦 13年 9月 （1763）
	和光市新倉3-6-37	右引又道
	坂下・天野家（農豊稻荷境内）	
⑦	庚申塔（青面金剛像）	嘉永 7年 5月 （1854）
	和光市新倉3-11-75	右吹上かんおん道
	田端・天野家（屋号：新堀）	左引又道

4. 「道しるべ」の個別検討


現在7ヶ所ある道しるべのうち、道路上に設置されているものは漆台の滝不動前の庚申塔、1ヶ所のみである。他の6ヶ所は、宅地内あるいは境内にある。

何処に建てられていて、道しるべとしての働きをしていたのであろうか？

この点について、道しるべに刻まれている内容、明治時代の地図、江戸時代の絵図、各種記録の他、当該のお宅・近隣への聞き取りなどと共に、引又宿へ向けての地形（特に急坂）・経路などを考え合せて、元建てられていたであろう場所（辻）を推測した。

道しるべ毎の個別検討内容を、次ページの道しるべ一覧に続けて示す。

和光市内 引又道と道しるべ 一覧

① 

左 ところさわ □	青面金剛像	右 ひきまた 道 安永元年壬辰年十一月 白子村
発主 □ 円信法師		

和光市白子2-18-12
牛房・観音寺
庚申塔(青面金剛像)
安永元年12月(1722)

② 

武新坐郡 下新倉村願主柳下源八	明和五年 石橋建立勸化佛 子五月吉日	左 り川こへ右引また道
--------------------	--------------------------	----------------

和光市下新倉4-19-45
西本村・壹鑑寺
石橋建立勸化仏(文字塔)
明和5年5月(1768)

③ 

川越道	庚申塔 慶応二丙寅六月吉日 柳下源四郎	引又道
-----	---------------------------	-----

和光市中央1-1-55
丸山台・柳下家
庚申塔(文字塔) (田村屋酒店裏)
慶応2年6月(1866)

④ 

天下泰平国土安穩	青面金剛像	嘉永六年丑年七月吉日 上新倉村
----------	-------	--------------------

大左 引右
山 又
道 道

(香炉)

和光市新倉1-14
漆台・滝不動前
庚申塔(青面金剛像)
嘉永6年7月(1853)

⑤ 

三月天明八戌申 吉日	青面金剛像	奉納庚申 右引又ミチ 武州新座郡 下新倉村
---------------	-------	-----------------------------

和光市下新倉5-5-1
嶋・柳下家(長島)
庚申塔(青面金剛像)
天明8年3月(1788)

⑥ 

宝曆十三年九月十六日 講中三人	青面金剛像	武州新座郡上新倉村 庚申待願主上原治兵衛
--------------------	-------	-------------------------

(正面)
道又引右

和光市新倉3-6-37
坂下・天野家(農豊稻荷境内)
庚申塔(青面金剛像)
宝曆13年9月(1763)

⑦ 

願主 天野六□	青面金剛像	右吹上かんのん道 嘉永七年寅五□
------------	-------	---------------------

和光市新倉3-11-75
田端・天野家(新堀)
庚申塔(青面金剛像)
嘉永7年5月(1854)

建立年度順

①	安永元年12月	(1722)
⑥	宝曆13年9月	(1763)
②	明和5年5月	(1768)
⑤	天明8年3月	(1788)
④	嘉永6年7月	(1853)
⑦	嘉永7年5月	(1854)
③	慶応2年6月	(1866)

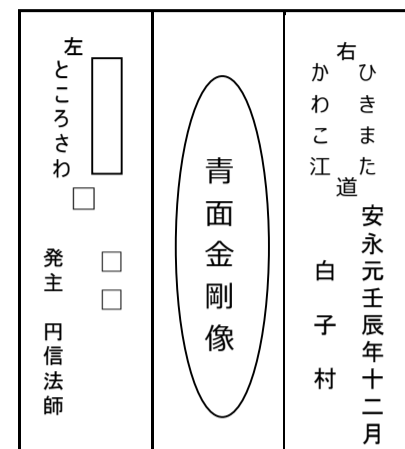
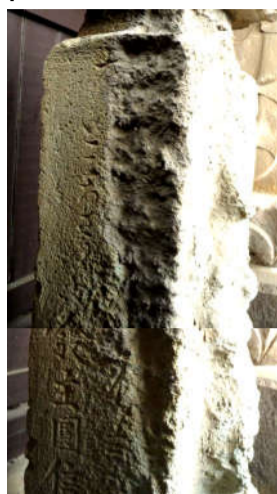
I. 牛房・観音寺境内

1. 概要

- (1) 設置場所：和光市白子2-18-12 (観音寺境内)
- (2) 石塔内容：庚申塔(青面金剛像)
- (3) 設置年月：安永元年12月(1722)
- (4) 写真・刻字内容：



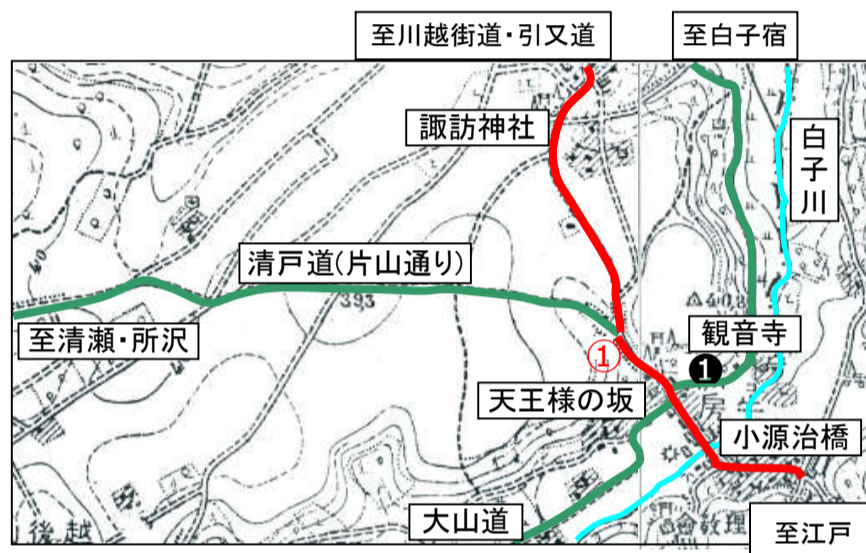
地蔵堂全景
(左端：庚申塔)



2. 位置図



現在の住宅地図 (第1図)



明治42年測図 (第2図)



明治44年測図 (第3図)
(富沢毅氏所蔵)

3. 建立当時の場所の推測・検討

(1) 地蔵堂移転再建の由来

庚申塔は境内の地蔵堂に安置されている。地蔵堂の由来書には、「この地蔵堂は戦後数年前までは市道412号線に隣接した場所に立っていたが、昭和35年観音寺東側に南向きに移転した。しかし、以前より地蔵堂の位置は好ましくないと、観音寺の人々が相寄り相計りこの度、本位置に移転再建したものである。平成2年4月18日」とある。

(2) 市道412号線とは観音寺の前の通りであり、西に向かった所の交差点を左に折れ、小源治橋へ向かう道である。そして、昔は観音寺の前の部分は、第1図の点線で示す道路であった。(第3図参照) 地蔵堂はこの点線で示す道路に面した場所にあったものである。

(3) 加山理髪店など地元の方々によると、「この庚申塔は昔からここ観音寺の境内にあったものだ」とのことである。(図中：①)

(4) この庚申塔には以下の「道しるべ」が刻まれている。
「右 ひきまた かわご江 道」、「左 □ ところさわ □」

当初から、この境内の場所に建てられていたとした場合、道しるべの内容と地理が合わない。左側面の文字がかけている箇所を推測すると「かたやま」「所沢」や「きよと」が考えられる。

(5) 塔は長年風雨に晒されたことによると思われる風化が進んでおり、この点からも何処かの辻にあったことがうかがえる。

(6) 庚申塔は安永元年12月(1722)の建立であり、これは今から290年以上前に建てられた「道しるべ」である。境内への移設はそう遠くはない昔と思えるが、現在の人々が知り得る以前のことなのであろう。

(7) 天王様の坂の上には二又の分岐がある。右への道は狭い道であったとのことである。左側の清戸道と比べると狭かったと思えるが、引又道の本道にあっても荷車が1台通れる程度の道(例えば、和光市駅前・本町通りの鈴木花店脇の道)と語られ、元々昔は狭い道であった。

(8) 天王様の坂を上りきった正面にあったとすると、左右方向の表示内容が一番合うが、地域(小字)が異なる諏訪原から牛房へ移すことは考え難い。

(9) これらを考えあわせると、図中①印の場所が当初に建立した場所と考えることが妥当となる。(右側は崖)

(10) 二又の右の道を北に進むと、川越街道の白子の坂上に出て、その先、浅久保にある「田村屋酒店前」の道しるべの所で川越街道から引又道への分岐となる。一方、左の道を西方向に進むと、現在は笹目通りにあるイエローハットに突当る。この先の道は昔の陸軍病院(現在、埼玉病院・諏訪原団地)の建設により、無くなっている。そして、市営運動場交差点付近へ出てくる。その先、西へ進むと「片山」「清瀬」「所沢」へと向かう。



「天王様の坂」の上分岐付近
左側が白子2-2-30辺り

4. まとめ

- (1) 庚申塔は当初、天王様の坂の上にあった。(図中：①) 地番は、和光市白子2-2-30辺り
- (2) 現在祀られている観音寺(和光市白子2-18-12)への移設時期は不明。地元の人々の記憶に無いくらい、以前のことである。
- (3) 引又道は、天王様の坂の上から、白子坂上で当時の川越街道へ出て、くらやみ坂を下り、浅久保で出て、田村屋酒店脇の引又道の分岐へ抜けるものである。
- (4) 引又道の始点は、小源治橋を東京側へ向かって、牛房通りとの交差点とした。

(5) 以上の結果、『武蔵古道・ロマンの旅』にてくる、観音寺前から、白子宿・吹上へ向かう道は引又道とは考えられないと推論する。

Ⅱ. 酒井町・壹鑑寺境内

1. 概要

- (1) 設置場所：和光市下新倉4-19-45 (壹鑑寺境内)
- (2) 石塔内容：石橋建立勸化仏(文字塔)
- (3) 設置年月：明和5年5月(1768)
- (4) 写真・刻字内容：



壹鑑寺境内



(正面)



下武 新羽 倉新 村坐 願郡 主施 柳主 下禪 源達 八	石橋 建立 勸化 佛 子 五月 吉日	明和 五年	左 り 川 こ へ 右 引 ま た 道
---	--------------------------------------	----------	--



谷戸川 旧川越街道から引又道を望む
(正面右：引又道/現在：農協通り)

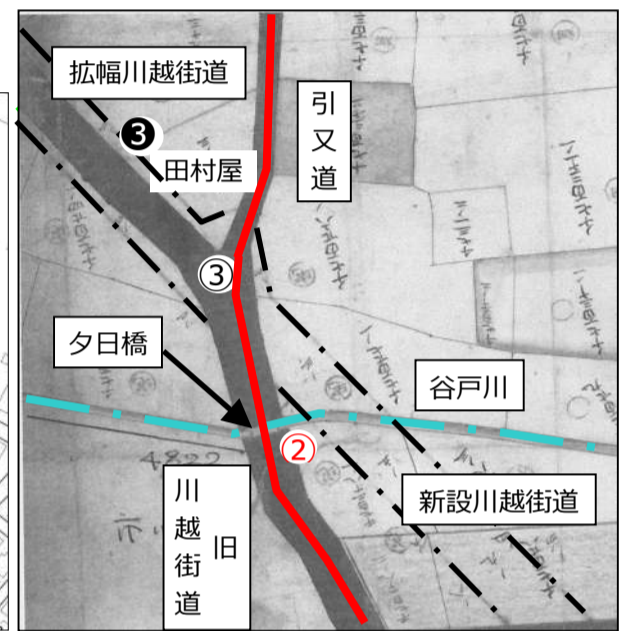
2. 位置図



現在の住宅地図 (第1図)



現在の住宅地図 (第2図)



公図 (第3図)

3. 建立当時の場所の推測・検討

- (1) この道しるべ、現在は、下新倉の壹鑑寺境内にある。(第2図：②)
- (2) この道しるべが当時建立された場所は以下のとおり、『郷土 志木 第40号』の「引又道を走る その2 和光市の引又道 - 井上國夫」に紹介されている。
- (3) 引用すると、「先日、百歳になられた住職さんにお会いしてこの石仏の元の造立されていた場所がほぼわかってきた。数年前、元藍屋の市川精一さんに移管を依頼されたもので、浅久保の元石橋が架かっていた三叉路がある位置に造立していたと思われるが、現在の何処に比定したらよいか、明治の迅速図を見ても確定できない。和光市の郷土史家に調査していただきたい」とある。
* 現住職にお伺いしたところ、境内へ移した時期は先代住職の時であり、昭和50年以前であろう。
* 市川さんに何うも、はっきりとは憶えていないとのこと。

- (4) この建立場所は市川さんの家の裏側に谷戸川(ドンドン川)があり、この旧川越街道に石橋が架かっていたものである。
- (5) この橋は夕日橋と呼ばれており、橋が道路化された際、あるいは隣の川越街道を新設する際に川が暗渠化となり、橋が無くなったものと思われる。市役所に記録は残されていない。
- (6) 工事の後、橋の脇に寝かされていたものを、近くの市川さんが菩提寺である壹鑑寺に移したものである。
建立場所の詳細、道の左右・川の前後の判断資料はない。
ここでは、道しるべのある右側面が手前を向いていたものとして、道の右側の中央1-1-1地先あったものとした。(図中-②)
* 谷戸川は大半が暗渠となっている。
* 末端は谷中川の「まました橋」の上流側に注ぎ込んでいる。

4. まとめ

- (1) 石橋建立勸化仏の塔は当初、谷戸川に架かる夕日橋のもとにあった。(図中：②)
地番は、和光市中央1-1-1地先と推測した。
- (2) 現在は、和光市下新倉4-19-45 (壹鑑寺境内)
(第2図：②)にある。

* 「石橋建立勸化仏」

- ・ 一般には寺社の建立・修復などの為に寄進を募ることを勸化・勸進という。往来の激しい川越街道の土橋(または板橋)が度々傷み、通行に支障を来すことから、丈夫な石橋に架替えたいと、地元の柳下源八氏が願主となり、禪達和尚が勸化したものである。
- ・ 勸化のお金をもって架替えた橋なので、「勸化仏」の塔を建てたものと思われる。
- ・ ちなみに、塔の頂部には、参拝した際に打石したものともいわれている跡のくぼみ「盃状穴(はいじょうけつ)」が多数見られる。



Ⅲ. 浅久保・柳下家宅地内

1. 概要

- (1) 設置場所：和光市中央1-1-55 (柳下源太郎氏宅地内)
- (2) 石塔内容：庚申塔(文字塔)
- (3) 設置年月：慶応2年6月(1866)
- (4) 写真・刻字内容：



(左側面)

(庚申塔・正面)

(右側面)

川 越 道	柳 下 源 四 郎	庚 申 塔	慶 応 二 丙 寅 六 月	引 又 道
-------------	-----------------------	-------------	---------------------------------	-------------

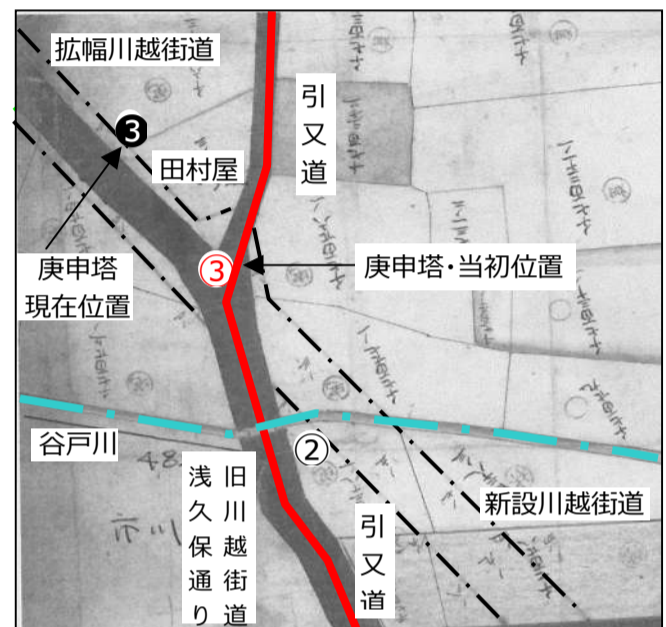


正面：田村屋酒店
(店先が元建立場所)
左奥：柳下家 (現在の場所)
手前：旧川越街道

2. 位置図



現在の住宅地図 (第1図)



公図 (第2図)

3. 建立当時の場所の推測・検討

- (1) 浅久保の西、浅久保通りが川越街道と交差する変則十字路の前方に田村屋酒店がある。
このうち、右側部分の川越街道は昭和10年頃の新道であり、当時は二又となっていた場所である。
- (2) この田村屋酒店の角から、右方向・北側へ延びる道が「引又道」であり、明治時代には、白子宿を基点とする「志木街道」と呼ばれていた。
現在の名称は「農協通り」である。
- (3) この田村屋さん、2代前まではここで茶店を商っていたとのことである。
その店先、図中：③の場所に庚申塔があったもので、
左側面に「川越道」
右側面に「引又道」
の道しるべが刻まれている。

- (4) 現在は、酒店の隣の柳下家の宅地入口にある。(図中：③)
- (5) 当時、庚申塔のあった三差路部を起点として、東京側は川越街道を新設、埼玉側は旧道の拡幅がそれぞれ昭和7年度迄に行われている。
その際、庚申塔は道路敷地内となったために、移設されたものである。
- (6) この庚申塔は、交差点向い側の「石橋建立勸化仏」の道しるべと30m程度しか離れていない。
しかし、勸化仏は98年前の建立であり、庚申塔の建立目的(庚申講・悪疫の防ぎ)とも異なるものである。
- (7) なお、和光市史(和光の石塔・石仏)の中で、両側面の道しるべのことが紹介されていないが、これは彫りが浅かったために見過ごされたものではなかろうか。

4. まとめ

- (1) 庚申塔は当初、田村屋酒店前の交差点内にあった。
(図中：③)
- (2) 地番は、和光市中央1-5-54地先
- (3) 現在は、和光市中央1-1-55
(柳下源太郎氏宅地内 図中：③)にある。

* II. 「石橋建立勸化仏」願主の柳下源八氏ならびに、
III. 「庚申塔」建立者の柳下源四郎氏、は、現在、庚申塔を敷地内で祠守している柳下源太郎氏のご先祖となる。

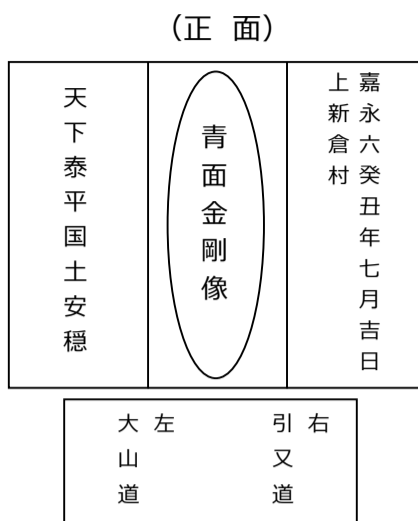
IV. 漆台・滝不動前

1. 概要

- (1) 設置場所：和光市新倉1-14-38地先(漆台・滝不動前)
- (2) 石塔内容：庚申塔(青面金剛像) - 香炉 -
- (3) 設置年月：嘉永6年7月(1853)
- (4) 写真・刻字内容：



(香炉)



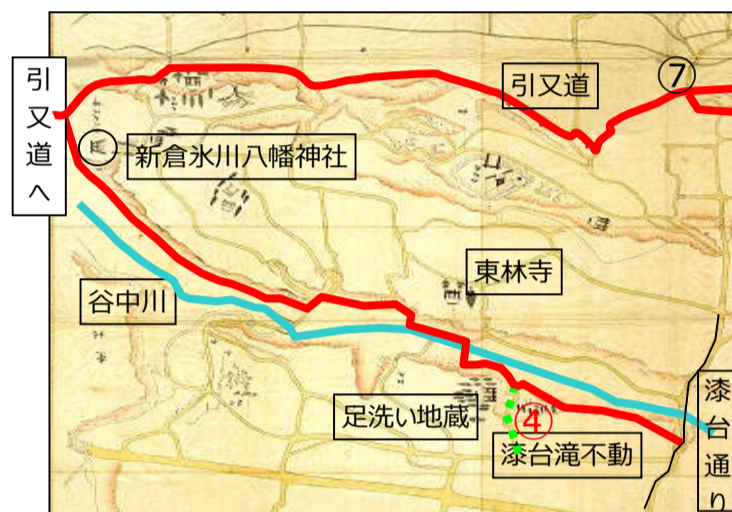
庚申塔(右端)と前面道路
(道路前方は漆台通りに向う)

庚申塔

2. 位置図



現在の住宅地図(第1図)



宝暦13年・新座郡上新倉村全絵図-部分-
(柳下満氏所蔵)(第2図)

* ⑦は、田端の天野家の庚申塔を示す。

3. 建立当時の場所の推測・検討

- (1) この道しるべ(図中:④)は唯一、塔体ではなく、その前面に置かれている香炉に刻まれているものである。
- (2) この道しるべの内容はどのようにみるべきであろうか？
どこかの辻にあったとすると、漆台通りに出てきた突当りが想定される。その場合、

○右引又道：この漆台の急坂を下り、谷中川を渡って今度は急坂を上り、新倉小学校の脇を通ってさらに長坂を下って行き、坂の先、札の辻で引又道へ出ることとなる。(第2図：⑦へ向かう)
坂下方面の人が江戸へ向かうには、この漆台の坂道を使わざるを得なかったが、相当にきつい道であった。

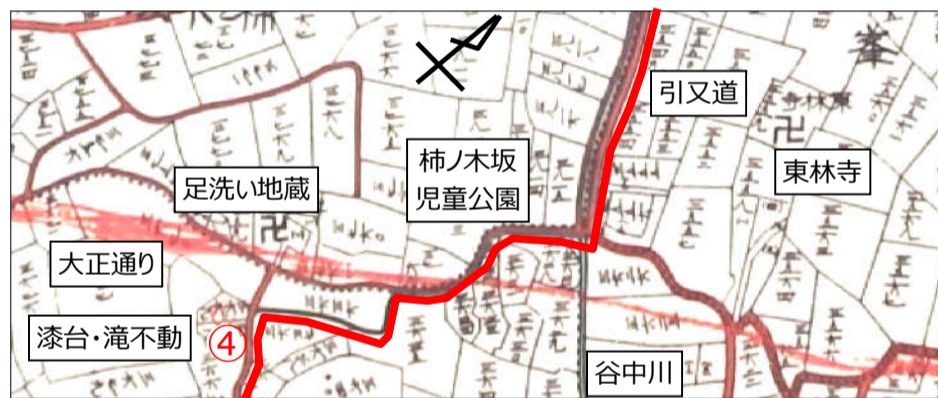
『にいくらさかしたくらのあゆみ』より

○左大山道：漆台通りを上り、妙蓮寺通り、和光市の駅、中央公民館の西側を抜けて長久保へ出て大山道へ向かうこととなる。しかし、この解釈の場合、辻での左右の方向が反対の表記となる。

- (3) 一方、盛土をして谷を埋め、急坂を解消した大正通りができる以前の村絵図が第2図である。

これをみると、漆台通りに出ることなく、谷中川沿いに道を下って行く赤池通りを進み、新倉氷川八幡神社の下へ出る道が描かれている。赤池橋の手前で引又道(現在の竹の下通り)と合流する。こちらの方が近道でかつ、平坦な道を通って引又へ向かうことができた訳である。

- (4) これを第1、3図で見ると、足洗い地蔵方面の高台から川へ向かう下り坂(現：大正通り)に対して、その手前を並行する形で滝不動からの道を進み、坂の途中で合流。大正通りを横切り、柿ノ木坂児童公園の中を川に向かって下り、そのまま谷中川の橋を渡る。そこから川に沿って赤池橋の方へ向って行くものである。



新倉村全図-部分- 大正10年(第3図)

- (5) このように考えると、この道しるべは、ここが「滝不動」を祀る霊験ある地として、この庚申塔を地域の人々がこの場所に建立したものであり、市内で唯一当時のままの場所に残されている庚申塔と考えるべきであろう。
- (6) 『上新倉村地誌』(明治20年4月)に河岸道として、「川越街道より東北に入り荒川へ達す 延長33丁25間」とある。(※3.65km) この道は、距離・方角より以下の様に推測される。
第三小学校西側の道を和光市駅へ向かい、妙蓮寺通り、漆台通りと進み、新倉ふるさと民家園の手前で左に入り、漆台の滝不動前に出て、上記引又道の道筋をたどり、竹の下通りの天神坂下から河岸へと向かう道である。
このことは、このルートが荷運搬の主要道として利用されていたことを示し、江戸時代には引又道としてのルートであったとする推測とも一致する。
- (7) 「昭和63年度・校内研 新倉地区フィールドワーク(笹沼正巳先生をお迎えして)」には、この道を「引又道」として案内図を載せている。

4. まとめ

- (1) 唯一、建立当初の位置に残されている庚申塔と思われる。(図中：④) 地番は、和光市新倉1-14-38地先(漆台・滝不動前)
- (2) 引又への道は、谷中川沿いに道を下って行き、新倉氷川八幡神社の下へ出て、引又道(現在の竹の下通り)と合流する経路となる。
- (3) 引又道の始点は、漆台の滝不動前の通りと漆台通りの交差点とした。
- (4) 「ちようちんかけ通り」と呼ばれる漆台の滝不動前の通りは、新倉河岸への河岸道とされていたと推測される。

V. 東本村・柳下家宅地内（長嶋）

1. 概要

- (1) 設置場所：和光市下新倉5-5-1（柳下家宅地内）
- (2) 石塔内容：庚申塔(青面金剛像)
- (3) 設置年月：天明8年3月(1788)
- (4) 写真・刻字内容



青面金剛像

奉納庚申 右引又ミチ

天明八戊申 武州新座郡
三月吉日 下新倉村



庚申塔2体（左：道しるべ）



道路部（左奥：合之道 中：新設道路 右：引又道）
（右手前：柳下家）

2. 位置図



現在の住宅地図（第1図）



明治42年測図（第2図）

3. 牛王山周辺地域の道しるべについて

- (1) 東本村・西本村・坂下地域には道しるべが3か所ある。（元の場合がこの地域と離れている壹鑑寺分：②を除く）－第2図参照
- (2) この道しるべは現在、いずれも宅地内にあるが、次のいずれの資料にも道しるべが元あった辻のことには触れられていない。
『大和町のむかし 石仏』（昭和44年3月発行）
『上新倉の民俗』（昭和55年3月発行）
『下新倉の民俗』（昭和56年3月発行）
『和光市史 民俗編』（和光の石塔・石仏）（昭和58年3月発行）
『にいくら・さかした 暮らしのあゆみ』（昭和58年3月発行）
『西本村・東本村・吹上 暮らしのあゆみ』（平成5年3月発行）

- (3) いくつかの資料は、合之道（坂下公民館通り）を「引又道」としているが、その経路をきちんと説明されていない。
『和光市史 民俗編』（図表・市域の主要な道と坂）－経路に沿った文字表示あり－（VI. 農豊稲荷の項を参照）
他に、『下新倉氷川八幡神社史』、『和光市歴史豆事典』も同様。
これは、農豊稲荷境内にある庚申塔（図中－⑥）に刻まれている「引又道」の文字が大きく、また、合之道に面していて、人々の目に触れ易かったからではなかろうか。
- (4) いずれにしても、現在では地元の古老（80才代の方々）にあっても、「引又道を知らない・聞いたことがない」との状況である。

4. 建立当時の場所の推測・検討

- (1) 庚申塔には、「右 引又ミチ」とあり、辻庚申であることを示している。
- (2) 現在は柳下家の昭和通りに面した角にある。（第1図：⑤）
平成27年までは同じ敷地の中で脇道に面して建屋の裏手であった。（第1図：⑤'）
- (3) 付近は昭和37年竣工の道路改良(昭和通り)により変わってきている。第2図、一点鎖線の部分は新設、その前後は道幅の拡幅を行っている。
その際に支障となって、敷地内に持ってきたということではなく、移設はそれ以前の話である。（同家談）
- (3) 一つ考えられることは、戦後の農地解放のおりに支障となり、同家の宅地内へ移したということである。（あるいはそれよりも以前か。）
- (4) 上記の昭和通りの脇道から金泉寺北側辺りにかけても、区画整理により、道路線形が大分変っているが、ここには「右引又ミチ」と合致するような該当箇所は見当たらない。

- (5) ここで、吹上方面から来て引又へ向かうには、次の何れかとなる。
①：柳下家角のT字路（⑤）を右に折れて脇道に入り、牛王山北側のハケタミチを進む。
*ハケタミチ：台地舌状部に沿って台地下に続く道
②：少し先を左に折れ、合之道（坂下公民館通り）を進む。
- (6) 第2図の⑦にある庚申塔には、「右吹上かんおん道・左引又道」と刻まれている。
これは、牛王山北側のハケタミチのことを指していると考えられる。
- (7) これらを考え合せ、さらにはこの辺りどこの地点をみても「右引又ミチ」に合致する場所が見当たらないということから、元は柳下家と脇道を挟んで西隣の下新倉5-2-18（第1図⑤）辺りに建立されていたものであろうと推測する。（あるいは昭和通りの反対側か？）
従って、柳下家の脇を北に入る道が、「引又道」とであると推測できる。
- (8) なお、上記（5）②の合之道へ入る道もVI項より、引又道とした。

5. まとめ

- (1) 庚申塔は当初、
柳下家と脇道を挟んで西隣にあったと推測する。（図中：⑤）
- (2) 地番は、和光市下新倉5-2-18地先
- (3) 引又道は、柳下家の前面道路（現：昭和通り）から同家西角を北側に折れ、牛王山北側のハケタミチへ抜けたものと推測する。
（注）合之道は、VI. 農豊稲荷より、引又道であると推測した。

VI. 坂下・農豊稲荷境内

1. 概要

- (1) 設置場所：和光市新倉3-6-37 (⑥ 天野家稲荷内) = 平成10年10月以降
 : 和光市新倉3-6-50 (⑥' 農豊稲荷) = 昭和4年以降
- (2) 石塔内容：庚申塔(青面金剛像)
- (3) 設置年月：宝暦13年9月(1763)
- (4) 写真・刻字内容：



(正面)

宝奉 曆造 十立 講三 中九 三金 十月剛 六吉 人日	青 面 金 剛 像	庚武 申州 塔新 願座 主郡 上上 原倉 治兵 村衛
道又引右		



広い道は合之道。T標示の角に庚申塔はあった。



農豊稲荷(天野家宅地内)

2. 位置図



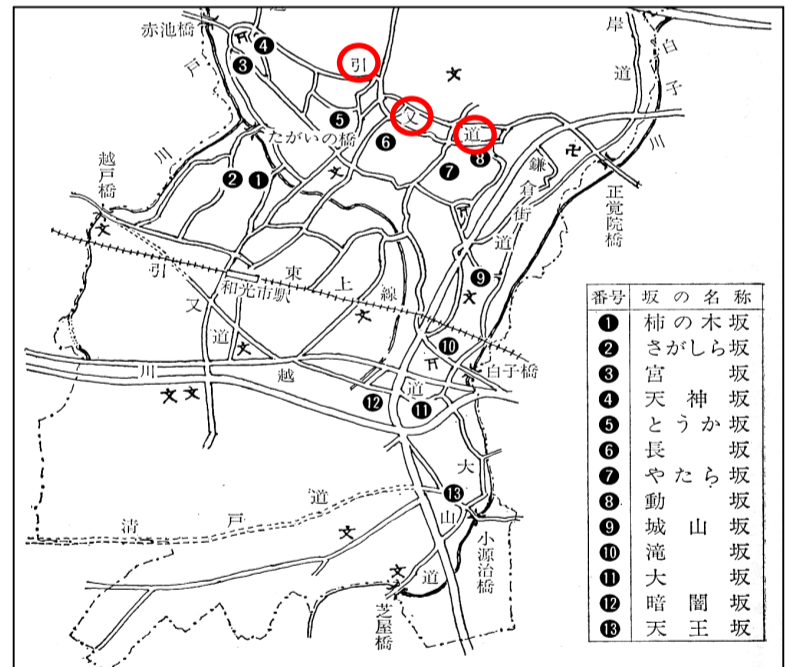
現在の住宅地図(第1図)



明治42年測図(第2図)

3. 建立当時の場所の推測・検討

- (1) この庚申塔は農豊稲荷社(⑥)の境内にある。平成10年10月までは、合之道に面した場所にあった。(⑥')
- (2) この稲荷社は昔近くの満願寺にあったが、昭和4年この地に移された。その際に農豊の二字が加えられたという。
- (3) この庚申塔の道しるべの台石に大きく「右引又道」とあり、辻庚申であることを示している。
- (4) 元の場所は、合之道を西に進み、長坂に出た所で右に曲がるとするルートが、一番すっきりとする。
 実際、『和光市史 民俗編』の中に図表「市域の主要な道と坂」の中には、この道に沿って「引又道」と表示している。(第3図)
- (5) 『和光市歴史豆事典』(埼玉県歴史教育者協議会・和光支部 昭和53年8月)には、「新倉村と下新倉村の村境の四辻に立派な庚申塔が建てられ、疫病神が村に入らないよう、にらみをきかせています」とある。しかし、掲載の写真は農豊稲荷境内-⑥'の中へ移された後のものとなっている。
 そして、「その道を村の人たちは引又道と呼んでいる」とも記している。
- (6) 庚申塔があった辻の場所に関して、近隣で憶えている方が殆どいない中、合之道の元農豊稲荷の向い側に住む80代の方が覚えていらした。
 第1図中、⑥の場所(新倉3-6-48角・地先)である。
 (ただし、並びの天野医院側であったかも知れないとのことである)



主要な道と橋(和光市史民俗編)(第3図)

- (7) 農豊稲荷への移設時期は不明であるが、町の道路工事により支障となった際に、天野氏の好意により、農豊稲荷境内へ移したとの話あり。
 (新倉氷川八幡神社・石山宮司)
- (8) この結果、合之道を⑥の場所で右・北側に曲がり、現在ある農豊稲荷(⑥)の前を通り、昭和通りへ出て左折、新倉郵便局先(札の辻)を右折して、牛王山北のハケタミチで吹上方面から来る引又道へ突当り、合流するものと思われる。
 これは、田端・天野家の庚申塔の「左 引又道、右 吹上かんおん道」の道しるべと合致する。

4. まとめ

- (1) 庚申塔は当初、元農豊稲荷近くの辻にあった。(図中：⑥)
 地番は、和光市新倉3-6-48地先の角である。
 現在は、天野家敷地の農豊稲荷内(新倉3-6-37)にある。
- (2) この引又道の始点は、合之道の東端の昭和通りの交差点部とした。

Ⅶ. 田端・天野家宅地内（新堀）

1. 概要

- (1) 設置場所：和光市新倉3-11-75（天野家宅地内）
- (2) 石塔内容：庚申塔(青面金剛像)
- (3) 設置年月：嘉永7年5月(1854)
- (4) 写真・刻字内容

(左側面)		(正面)	
願主	左	青面金剛像	右
天野六〇	引又道		吹上かんおん道
			嘉永七年寅五〇



(庚申塔) (稻荷社)

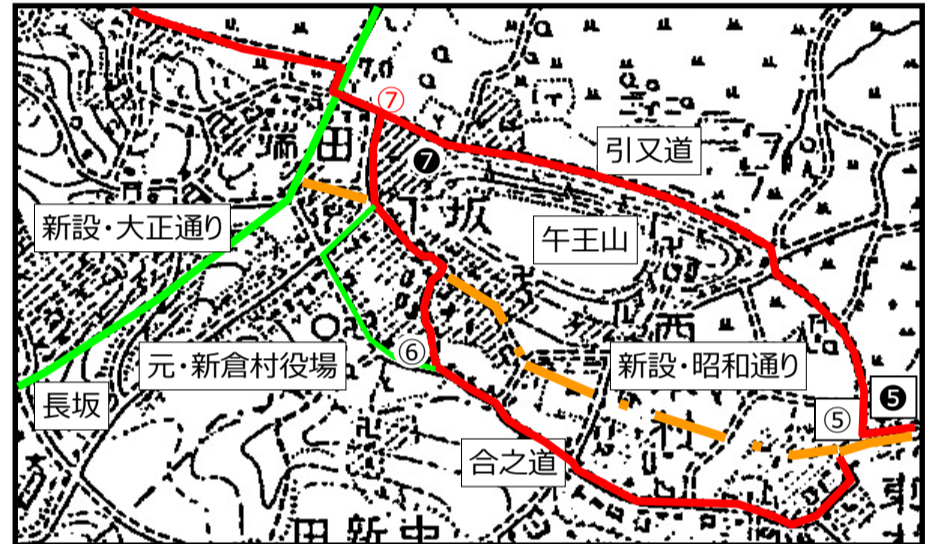


正面突当り⑦が引又道の合流点

2. 位置図



現在の住宅地図 (第1図)



明治42年測図 (第2図)

3. 建立当時の場所の推測・検討

- (1) この道しるべは天野家の宅地内にある。(図中-⑦)
高さは50cm弱と低いが正面には、「左引又道 右吹上かんおん道」と刻まれている。どこかの辻にあったものである。
- (2) 天野氏によると、以前は同じ宅地内の道路の際にあった。(⑦')
居宅建替えの際に同じ敷地内の現在の場所へ移した。
以前は道路向い側の分譲地（以前は梅の木が沢山植えられていた）角にあったと思われる。(⑦'')
- (3) しかし、⑦'の場所とした場合、道しるべの内容が左右逆となる。
場合によると、昔は広い土地を持っており、戦後の農地解放の際に土地を手放したと聞いている。その際に移したのかも知れない。
その場合、⑦'の場所もありうるが、確たるものはない。

- (4) ここでは、道しるべの案内と道路の関係から、⑦'の地点を当時の場所と推測した。
- (5) この道しるべにある「左引又道 右吹上かんおん道」は、ここを基点として左右で道の名前が異なるというものではない。
一本の道を、進む方向によって道の名前を使い分け、
○左に進む時には「引又道」、
○右に進む時には「観音道」と呼んでいたものである。

4. まとめ

- (1) 庚申塔は当初、
昭和通りの札の辻交差点を北に入った突当りにあったと推測される。(図中：⑦)
地番は和光市新倉3-12
- (2) 現在は、近くの天野家（屋号：新堀）の宅地内
新倉3-11-75に祀られている。(図中：⑦)
- (3) この庚申塔は、左方向の西行きを「引又道」として引又宿への案内を、右方向の東行きを「かんおん道」として吹上観音への案内をしている。



午王山北側のハケタミチ 前方は午王山
左側一体、昔はすべて見通しがきいた水田であった。
右側の建屋の奥・道路に面した場所が⑦'の位置となる。

5. 引又道の経路と道みちしるべの見方

前記4項の個別検討に際して、各所にある道しるべ全ての前面道路を「引又道」とするか、あるいは、一部を「引又道へ続く道」とするかについて、判断に迷った。

以下、道しるべの見方（定義）に関する検討内容を示す。

5-1. 道しるべの見方の結論

(1) 道しるべの見方（定義）は下記によった。

道しるべがある箇所は、「すべて引又道である」との見方をとるものとした。

(2) 上記に伴い、引又道の始点を下記の様に設定した。

①：都県境近くの道しるべは、都内側の人々に対する案内の意味合いもあることから、始点を都県境とした。

②：引又道から分岐した形の道しるべは、その前面道路の範囲を始点とした。

以下、その根拠を記す。

5-2. 道しるべの見方（その1）：本道と枝道

(1) 道しるべは「進むべき道の方を案内する表示塔」であるが、その見方については、当初次の二通りを考え、市内道しるべの分類を行った。

それは、道しるべの建立場所が、

①：「引又道」そのものを示している。

—実線—

②：「引又道への方向」を示している「枝道」。

—破線—

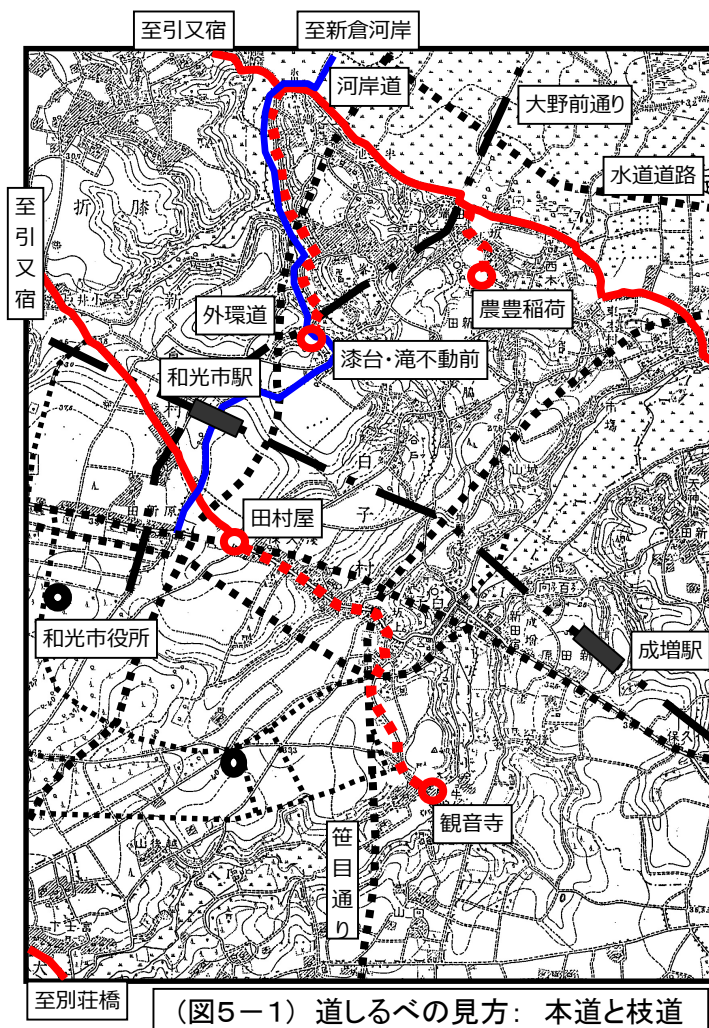
(図5-1参照)

(2) 理由としては、右図の実線で示す引又道に対して、破線部分の

①：観音寺から田村屋間の道は、地元の牛房、通過する坂上・浅久保（旧川越街道）地区において、引又道と呼んだことはなく、その認識もない。

②：漆台の滝不動前についても、引又道とは離れた場所となる。また、道も大分狭い。

③：農豊稲荷についても枝道に見える。



(図5-1) 道しるべの見方：本道と枝道

5-3. 道しるべの見方（その2）：全て本道

(1) 検討を進める中、漆台の滝不動前の道は、「河岸道」として利用される主要道であったと推測された。

このことは、上記の道しるべの見方（その1）に対して、滝不動前の道は昔から「引又道」であったとする見方ができる。

【河岸道】

- ①：『上新倉村地誌』（明治20年4月）には、道路の項に、県道としての川越街道が1件、里道（国道・県道以外の道）として「河岸道」が1件が記されている。
その内容は「長：川越街道ヨリ東北二入り荒川ニ達ス。延長33丁25間 幅：2間 形状 険夷相半ス」とある。
 - ②：この河岸道について、『広報わこう』「ふるさと和光さんぽ」（平成24年1月号）に「荒川・新河岸川の舟運で栄えた河岸に通ずる「河岸道！」として紹介されている。この中で、「伝承によれば、天神坂を下りたところから新河岸川までの道とされています。……残念なことに上ノ郷から川越街道までの経路は分かっていません」とある。
 - ③：川越街道から河岸のあった荒川（新河岸川）までは直線の距離にして、2.8kmである。地誌の33丁25間（3.65km）とは大分離れた距離となる。この経路に関して検討を行うと、以下の通りとなる。
 - (a) 川越街道から東北へ進む道は、上新倉村と下新倉村の村境道でもあった、第3小学校西側を通る道が唯一となる。（その西側の駅前通りは当時整備されていなかった）
 - (b) 経路はイトーヨーカ堂の脇を通り、駅の中央を横断して、妙蓮寺通り・漆台通りと進み、新倉ふるさと民家園の手前で左に曲がり、漆台の滝不動前に出る。その先は足洗い地蔵前の通り（現在の大正通りとは異なる）に合流、谷中川沿いに進み、新倉氷川八幡神社下を廻り込んで天神坂の下竹の下通りへと抜けるものである。
 - (c) この道を図面上でたどった場合の距離は、約3.6kmとなる。ほぼ、3.65kmに近い距離となる。
 - (d) この経路は河岸への荷物運搬に際して距離的には長いですが、途中の坂道が緩やかで楽であることから、利用されたものと思われる。
 - ④：この道が主要道であったとすることは、漆台の滝不動前の庚申塔の道しるべにある「左 大山道」の表示より、河岸道を逆に川越街道へ向かって進み、川越街道を横切り直進するとその先で大山道（富士街道）へ出ることからも合致する。
- (2) 「引又道」は、各所・各方面から引又宿へ向けて設けられ、呼ばれていた。
- ①：練馬区土支田の別荘橋通り、道しるべは無いが、『練馬区の歴史』（練馬郷土史研究会：文）には、別荘橋通りが引又道であったと図入りで紹介している。（図5-1・左下参照）
 - ②：このことは、引又道であったという伝承はないものの、牛房地域からも引又道があったとする見方もできる。
 - ③：引又道の道しるべは引又宿を中心に、旧大宮市・旧与野市・旧浦和市・蕨市・戸田市・川越市・所沢市・武蔵村山市・新座市・清瀬市・旧保谷市など広範囲の地域に残されており、総数は53基となる。（志木市文化財保護審議会委員 井上氏調べ）

6. 和光～引又宿間の道筋

6-1. 和光市内の引又道

『和光市史 民俗編』には、引又道に関して次のように記されている。

○ 市域には二本の引又道があった。

(1) 第一の有名な引又道は、明治年間には志木街道とも呼ばれた道である。

これは、川越街道から下新倉の浅久保西端で分岐し、西北に進む道である。

（注：志木街道の根拠は不明、市中で呼ばれていた名称であろう。明治7年に引又は志木と改称）

(2) 市域を走るもう一本の引又道は、下新倉から新倉を通り、根岸・台を経て引又に至る道である。

これは現在では引又道とか志木道と呼ばれることもなく、不明な点が多い。

- これらの点および、和光市から引又宿へ至る道筋について、道しるべの内容・古地図・資料・聞き取りなどを基に次のように推察する。

6-2. 和光～引又宿間ルートの根拠と推察 (図6-1参照)

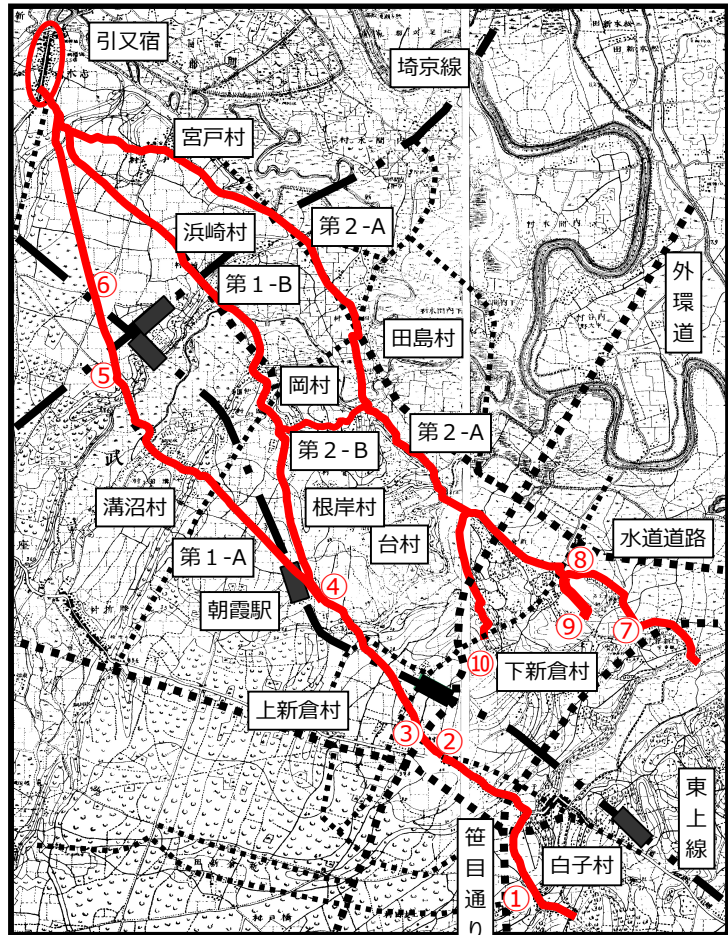
(1) 第1ルートA

○[概略ルート]

白子の牛房、天王様の坂のある清戸道から坂上で旧川越街道に入り、浅久保で引又道（現：農協通り）を経て、東上線を横切り、県道と和光志木線へ出て、朝霞駅で線路を横断して、二本松通りを進み、溝沼村を通り、北朝霞陸橋部にて3度線路を横断、西北へ一直線に進み、引又宿に至るルートである。

○[根拠・推察]

- (a) 牛房・観音寺境内にある庚申塔の道しるべ【右ひきまた かわご江道】は、近くの天王様の坂の上にあったと推測される。－①
- (b) 浅久保で旧川越街道と川越街道が交差する手前に谷戸川がある。ここには、現在壺鑑寺に納められている石橋建立勸化仏の道しるべ【右引また道】があった。－②
- (c) 上記交差点の向い側、田村屋酒店の前に庚申塔の道しるべ右側面に【引又道】があった。－③
- (d) 「江戸市ヶ谷～福岡村迄道略図（天保7年～1836）」『鷹狩と朝霞』（朝霞市立博物館）に、「下新倉・字浅久保・引又道」の表示が田村屋酒店脇に記されている。（図6-2参照）
- (e) 上記略図に、朝霞市内に入った根岸台7丁目の分岐部に、棒杭の道しるべ【左引又】の図示がある。－④（図6-2参照）
また、この分岐を右へ500m進んだ所の馬頭観音堂内に庚申塔がある。道しるべにある「左引又道 右大村（注：台村）根岸道」から推察すると、元は根岸台7丁目の分岐にあったとの見方ができる。（図6-3参照）
- (f) 東弁財2-5弁財坂の上辺り、現在道は残されていないが、分岐の所に庚申塔の道しるべ【右引又道】があった。－⑤ 現在は写真と図のみが残されている。
『朝霞の石造物Ⅲ』（朝霞市教育委員会）（図6-4参照）
同じ場所に棒杭の道しるべ【右引又】があった。（図6-2参照）
- (g) 北朝霞陸橋の下に、馬頭観音塔の道しるべ【引又道十五丁】がある。－⑥（図6-5参照）
- (h) 『郷土史朝霞』の中において、引又道を「志木道の旧称 弁財坂～引又河岸」としている。
- (i) 齊藤幸孝が文化12年(1815)、白子宿から南畑へ向かう途中、引又宿を通っていることが『郊外聞見録 享』に残されている。
そこには、経路として、「白子宿」・「浅窪」・「溝沼村」・「引又宿」とあり、溝沼村を經由していることが分かる。



(図6-1) 引又道と道しるべ

(j) 『広報やまと』に文化財シリーズとして「志木街道」が載っている。(昭和43年8月15日号)

「明治時代、志木街道とは白子宿よりやみ坂を上り白子坂上－浅久保－田村屋商店裏から・・・小井戸までの間で、白子宿より西浅久保までは旧川越街道と併合しているが・・・さらに朝霞市の岡、浜崎を経て足立町志木に至っていた・・・」とある。

- ・これは、6－1項の書いてある志木街道のことである。
- ・そして、岡・浜崎とあるのは朝霞駅東口より先の第1ルートBのことを示している。
- ・志木街道制定の根拠は探し得なかったが、『文化財をたずねて』（和光市教育委員会）の中、引又道の項に同様の記述・写真が掲載されている。
- ・この掲載内容に関して、いくつかの疑問点を以下に記す。
 - ①：白子宿から浅久保間は県道の川越街道（各村地誌 明治20年）であり、昔から川越街道と呼ばれている道を敢えて志木街道と呼ぶ必要性が分からない。
 - ②：上記区間は白子村・下新倉村・上新倉村の各村を通過しているが、村道の指定はされていない。
 - ③：上記にある「白子宿よりやみ坂を上り白子坂上」の「やみ坂」、前後の地名からすると、現「大坂」を指しているが、明治42年の「白子坂改修工事に関する県会請願書」では白子坂としている。
 - ④：また、白子宿の近くで道しるべのある牛房の「天王様の坂」についてもやみ坂の伝承はない。
やみ坂とは、何処の坂を示しているのか？ 誤植か？
- ・以上のことから、当面、旧川越街道の白子宿から浅久保の間は、引又道とすることから外すこととした。

(2) 第1ルートB

○[概略ルート]

- ・第1ルートAから、県道和光志木線の朝霞駅東口入口の100m程手前で分かれて東圓寺前交差点を直進、引又宿入口の手前で第1ルートAと合流するルートである。

○[根拠・推察]

- (a) このルートの始点である第1ルートAとの分岐点からの先には、途中、分岐路が一ヶ所もなく、1本道であることによるものか、根拠となるべき道しるべ・絵図・記録などは残されていない。
この道は明治初年の地図に載っている道である。道しるべなどは見当たらないが、元々上記理由により無かったか、あるいは開発に伴い廃棄されたことも考えられ、道しるべが無いからといって、一概に否定はできない。
- (b) 第1ルートAと比べても、距離・坂・川横断など殆どが同じ環境・条件である。
敢えて言えば、ルートの殆どが畑である中、第1ルートA途中の溝沼村は集落がまとまって多数あるのに対して、第1ルートBの岡村・浜崎村は民家がまばらである。農間の商い屋・休憩・飲み水・雨宿りなど溝沼村を通る第1ルートAの方が利用し易かったのではなからうか。
- (c) 第2ルートBが東圓寺前交差点の手前で合流してくる。

(3) 第2ルートA

○[概略ルート]

- ・下新倉吹上観音下から昭和通りを西に進み、午王山の北側から竹の下通りとハケタミチを進み、赤池橋、その先根岸台でもハケタミチを進み、笹橋を渡り、花の木交差点、内間木支所交差点、宝蔵寺交差点を通り、第1ルートBに合流するルートである。

*ハケタミチ：台地舌状部に沿って台地下に続く道

○[根拠・推察]

- (a) 下新倉・東本村の柳下家（長嶋）に、庚申塔の道しるべ【右引又ミチ】がある。－⑦
これは吹上観音方面から、午王山北のハケタミチへ進むことを示している。
- (b) 新倉・田端の天野家に、庚申塔の道しるべ【左引又道】がある。－⑧
これも午王山北のハケタミチを示しており、西行きを引又道、東行きを（吹上）観音としている。

(c) 近くの新倉・坂下の天野家の農豊稲荷境内に、庚申塔の道しるべ【右引又道】がある。－⑨

これは合之道から、現農豊稲荷の前を通り、上記のハケタミチと合流することを示している。

(d) 新倉・漆台の滝不動前に、庚申塔の道しるべ【右引又道】がある。－⑩

この道しるべは第1・第2ルートと大分離れているが、近くを流れる谷中川に沿って下り、赤池橋の手前で竹の下通りを進んでくる第2ルートに合流することを示している。

(e) 『上新倉 下新倉 白子村図』(柳下満氏所蔵・作成年月不明－明治20年以前－)に、新倉氷川八幡神社下の赤池橋の所に、「臺村ヨリ濱崎ヲ経テ志木驛へ通入」とある。(図6－7参照)

この内容からは二通りのルートが考えられる。

①：台村・根岸村を経て笹橋を渡り、田島村・浜崎村・宮戸村を経て志木(引又)宿へ至る。

＊急坂は無いが、浜崎村の外れを通ることとなる。(第2ルートA)

＊「和光市～引又宿間 引又道案内図(第2図)」の地図にある「根岸村」と「台村」の位置関係は正しくは、ほぼ逆のイメージとなる。

②：笹橋の手前で柵坂を上り、第1ルートBと合流、志木宿へ至る。(第2ルートB)

＊柵坂は長い急坂である。現在、柵塚古墳の北側を廻る緩やかな坂があるが、明治初年の地図に、この坂は見当たらない。後年度に造られたものであろう。

ただし、柵坂は第1ルート二本松通りの二本松から笹橋のたもとにあった根岸河岸への河岸道であったと考えらる。ここには車押しの人夫が居たのであろうか？白子の大坂と異なり、近くに回り道はあるが。

また、徒歩の場合は、この柵坂を上り、途中に岡村・浜崎村の集落がある第1ルートBを通るものと考えられる。

(f) 『武蔵古道 ロマンの旅』(芳賀善次郎著)に「引又道」が出てくる。ここに書かれている引又道の起点・終点とは異なるものの、その他のルートは第2ルートAと同じで、古来からある道である。

(注)・この本の前書には、「鎌倉街道を調査する中で調べた、江戸期以前からあった古道につき、纏めたものである」としている。さらには、このルートを「仮称：引又道とする」とある。

・江戸時代前期に新河岸川の舟運が始まると、多数の河岸場が置かれた。引又河岸は奥州街道と新河岸川の交点に位置し、内陸部との交通に恵まれて、明暦(1655－1658)から寛文(1661－1673)にかけて、市や宿が設けられた。引又河岸の幕府公認は元禄3年(1690)、5代将軍綱吉の時代となる。

そして、引又河岸・宿が最も繁栄したのは、幕末から明治初期にかけてである。

・このように、引又宿を起点とするこの資料における「引又道」は江戸期以降のことであり、同書における古道としての「仮称引又道」とは異なるものである。

(g) 第2ルートに関する道しるべ・絵図等の記録類は、上記(e)の和光市以外は一切見当たらない。従って、第2ルートの笹橋付近から先のルートは推測の域をでない。

(4) 第2ルートB

○[概略ルート]

・第2ルートAの笹橋手前で分岐して、柵坂を上り、朝霞第二小学校脇を右に折れ、湧水代官水前を通り、県道和光志木線へ出て、第1ルートBに合流する。この間の距離は約800m。

○[根拠・推察]

前記(3)・(e)・②項のとおり。

6－3. 和光～引又宿間のルート

前記に基づく各ルートの概略経過地を示すと、以下のとおりとなる。

(1) 第1ルートA

- 白子牛房・小源治橋の東京側、向山通りとの交差点～天王様の坂・清戸道～白子坂上・旧川越街道～下新倉浅久保旧川越街道と川越街道交差点（田村屋酒店脇）～農協通り～鈴木花店脇～【本町6番地・本田技研・東上線＝道なし】～東上線北側和光バーディーゴルフ（バッティングセンター）裏～北原小【一部校内を通過＝道なし】～県道と和光志木線～越戸橋～根岸台7丁目交差点～仲町2丁目【朝霞駅東口入口交差点100m程手前～朝霞陸橋～線路西側間＝道なし】～二本松通り～新高橋（元の橋は下流側、道のみ残る）～弁財坂～【東弁財2-5付近～朝志ヶ丘1-1間＝道なし。うち、西弁財1-16付近には一部残っている】～北朝霞陸橋～県道と和光志木線～江戸道～本町（引又宿）。

(2) 第1ルートB

- 第1ルートAの県道と和光志木線、朝霞駅東口入口手前から分岐～岡1丁目交差点（交差点の前後区間で右側に旧道あり）～東圓寺前交差点～不動坂（坂の途中を左折。直進する道は岡橋まで新道＝中央通り）～朝霞市立博物館前・脇～【中央通り横断～朝霞第2中校～岡橋手前＝道なし】～岡橋～武蔵野線高架先200m程～【この先朝霞浄水場敷地内＝道なし】～朝霞浄水場(西)交差点100m程手前の県道～昭和新道交差点一つ手前、押釦式信号のある交差点で第1ルートAに合流・右折～江戸道～本町（引又宿）。

(3) 第2ルートA

- 白子・吹上観音下交差点近くの都県境・水行場跡～昭和通り～長島バス停先を右へ曲がる～午王山北側ハケタミチ～大野前通り直前・農豊稲荷からのルート合流～新倉交番～竹の下通り（ハケタミチ）～新倉氷川八幡神社下で漆台・滝不動前から赤池通りを進むルートと合流～赤池橋～根岸台3丁目北側のハケタミチ～県道朝霞蕨線を右折～笹橋（根岸河岸）～花の木交差点直進（県道横断・らあめん花月の南側）～突当りを左折～【県道朝霞蕨線～内間木支所交差点間＝道なし】～内間木支所交差点～宝蔵寺交差点～大原町内会会館（やつじ公園）にて、和光志木線を来る第1ルートBと合流～本町（引又宿）。

(4) 第2ルートB

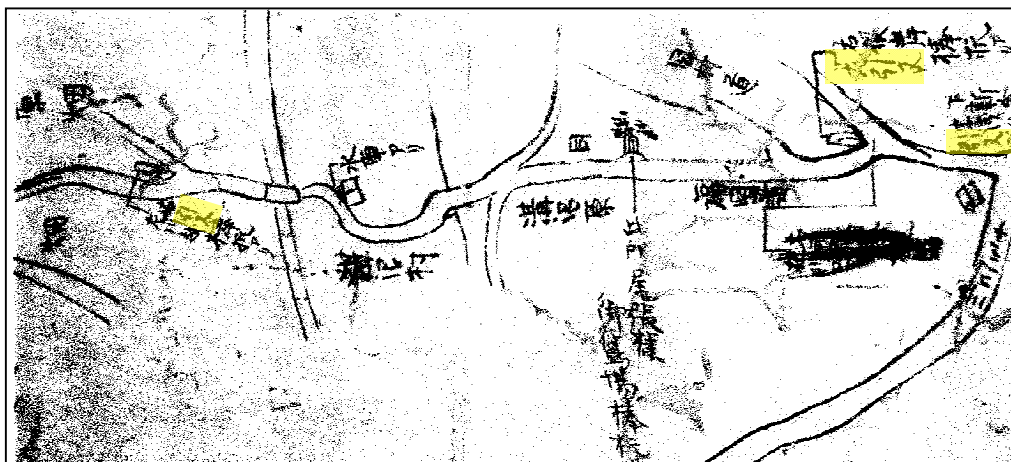
前記6-2(4)のとおり。

(5) 以上に基づく、和光～引又宿間のルート図を下記に示す。

第1図「和光市内 引又道とみちしるべ 案内図」（明治42年測図 縮尺：1/2万より）

第2図「和光市～引又宿間 引又道案内図」（明治13年測図 縮尺：1/2万より）

第3図「和光市～引又宿間 引又道航空写真」（昭和23年撮影より）

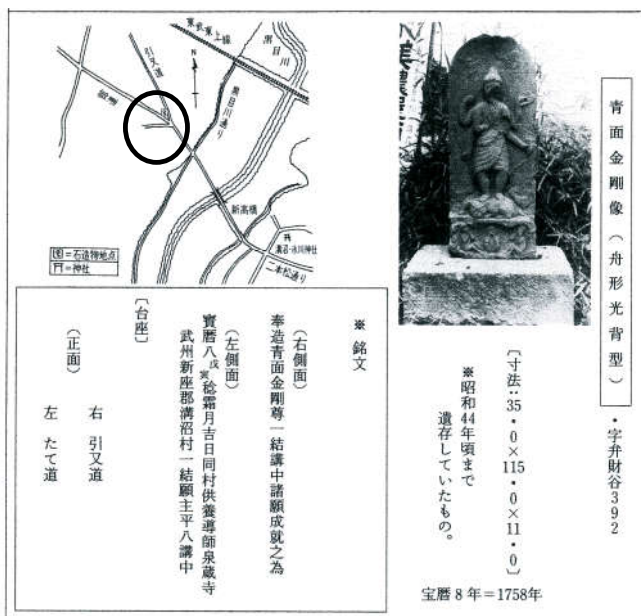


(図6-2)「江戸市ヶ谷～福岡村迄道略図(天保7年)」『鷹狩と朝霞』(朝霞市立博物館)



文化十三歳月
 左引又道

(図6-3) 根岸の馬頭観音堂内・庚申塔



(図6-4) 東弁財・分岐 庚申塔『朝霞の石造物Ⅲ』



引又道十五丁

(図6-5) 北朝霞陸橋下・馬頭観音



(図6-6) 『上新倉 下新倉 白子村図』(柳下満氏所蔵)

7. まとめ

1. 道しるべの当初の所在地

和光市内にある道しるべ7ヶ所の当初に建立された場所は、次の様な結果であった。

- ① 元々の場所にあったとしたもの。1カ所（漆台滝不動前）
- ② 元の場所を推定できたもの。3カ所（観音寺境内→天王様の坂上、壹鑑寺境内→浅久保・谷戸川の夕日橋袂、浅久保・柳下家→川越街道・農協通り交差点）
- ③ 元の場所を推測したもの。3カ所（東本村・柳下家→同家と道を挟んだ西側、農豊稲荷境内→稲荷近く・合之道T字路、田端・天野家→牛王山北側通りと長坂からのT字路）

2. 引又道の本道と枝道

引又道のルートから離れた場所にある道しるべ（観音寺、漆台・農豊稲荷）を引又道の「本道」とするか、それとも、引又道へ出る方向を示している「枝道」とするか判断に迷ったが、漆台・滝不動前の庚申塔前の道は、上新倉村の河岸道（旧川越街道～新倉河岸）の一部との道は、上新倉村の河岸道（旧川越街道～新倉河岸）の一部と重なり、主要道と推測され、結果として引又道でもあったと推測できることを主な理由として、全てを「引又道」の本道とした。

3. 引又宿への経路

和光市から引又宿への経路は、4ルートあったものとした。

- ① 第1ルートA：越戸橋を渡り、溝沼を通るルート。
- ② 第1ルートB：第1ルートAを朝霞駅東口で分岐、岡村を通るルート。
- ③ 第2ルートA：根岸村にて笹橋を渡り、宮戸村を通るルート。
- ④ 第2ルートB：笹橋手前で柘坂を上り、岡村にて第1ルートBに合流するルート。

【参考とした資料】

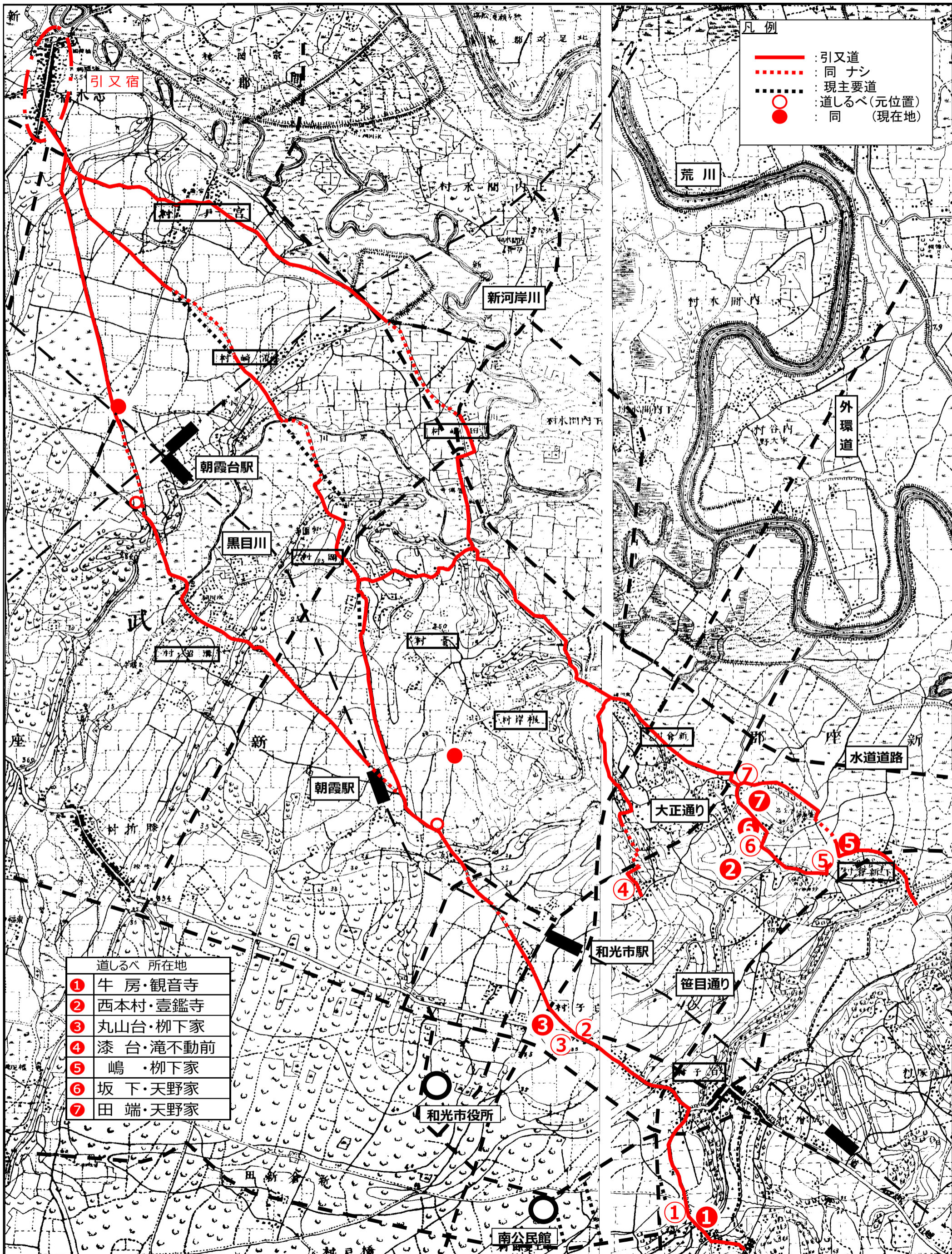
- | | | |
|------------------------------------|----|-------|
| 1. 『和光市史 民俗編』「道と街道」（和光市史編纂室） | …… | 昭和58年 |
| 2. 『十方庵遊歴雑記』「新座郡引又宿のわたり樋」 | …… | 大正5年 |
| 3. 『武蔵古道 ロマンの旅』（芳賀 善次郎） | …… | 昭和59年 |
| 4. 『郷土志木』「引又道の話」（志木市郷土史研究会） | …… | 平成23年 |
| 5. 『にいくら さかした 暮らしのあゆみ』（和光市坂下公民館） | …… | 昭和58年 |
| 6. 『和光市史 史料編3』「上新倉村地誌」（和光市史編さん室） | …… | 昭和59年 |
| 7. 『大和町のむかし 石仏』（大和町教育委員会） | …… | 昭和44年 |
| 8. 『上新倉の民俗』（和光市史編さん室） | …… | 昭和55年 |
| 9. 『下新倉の民俗』（和光市史編さん室） | …… | 昭和56年 |
| 10. 『西本村 東本村 吹上 暮らしのあゆみ』（和光市坂下公民館） | …… | 平成5年 |
| 11. 『下新倉氷川八幡神社史』（下新倉氷川八幡神社） | …… | 平成20年 |
| 12. 『和光市歴史豆事典』（埼玉県歴史教育者協議会 和光支部） | …… | 昭和53年 |
| 13. 『ふるさと和光さんぽ』（和光市） | …… | 平成23年 |
| 14. 『練馬区の歴史』（練馬郷土史研究会） | …… | 昭和52年 |
| 15. 『鷹狩りと朝霞』（朝霞市博物館） | …… | 平成23年 |
| 16. 『朝霞の石造物(Ⅲ)』（朝霞市教育委員会市史編さん室） | …… | 平成6年 |
| 17. 『郷土史朝霞二』「朝霞市の道」（朝霞市郷土史研究会） | …… | 昭和63年 |
| 18. 『郊外間見禄 享』（斉藤幸孝） | …… | 昭和49年 |
| 19. 『文化財をたずねて』「引又道」（和光市教育委員会） | …… | 平成16年 |
| 20. 『広報やまと』「文化財シリーズ 志木街道」（大和町） | …… | 昭和43年 |

和光市内 引又道と道しるべ 案内図 (第1図)

0 500 1,000m



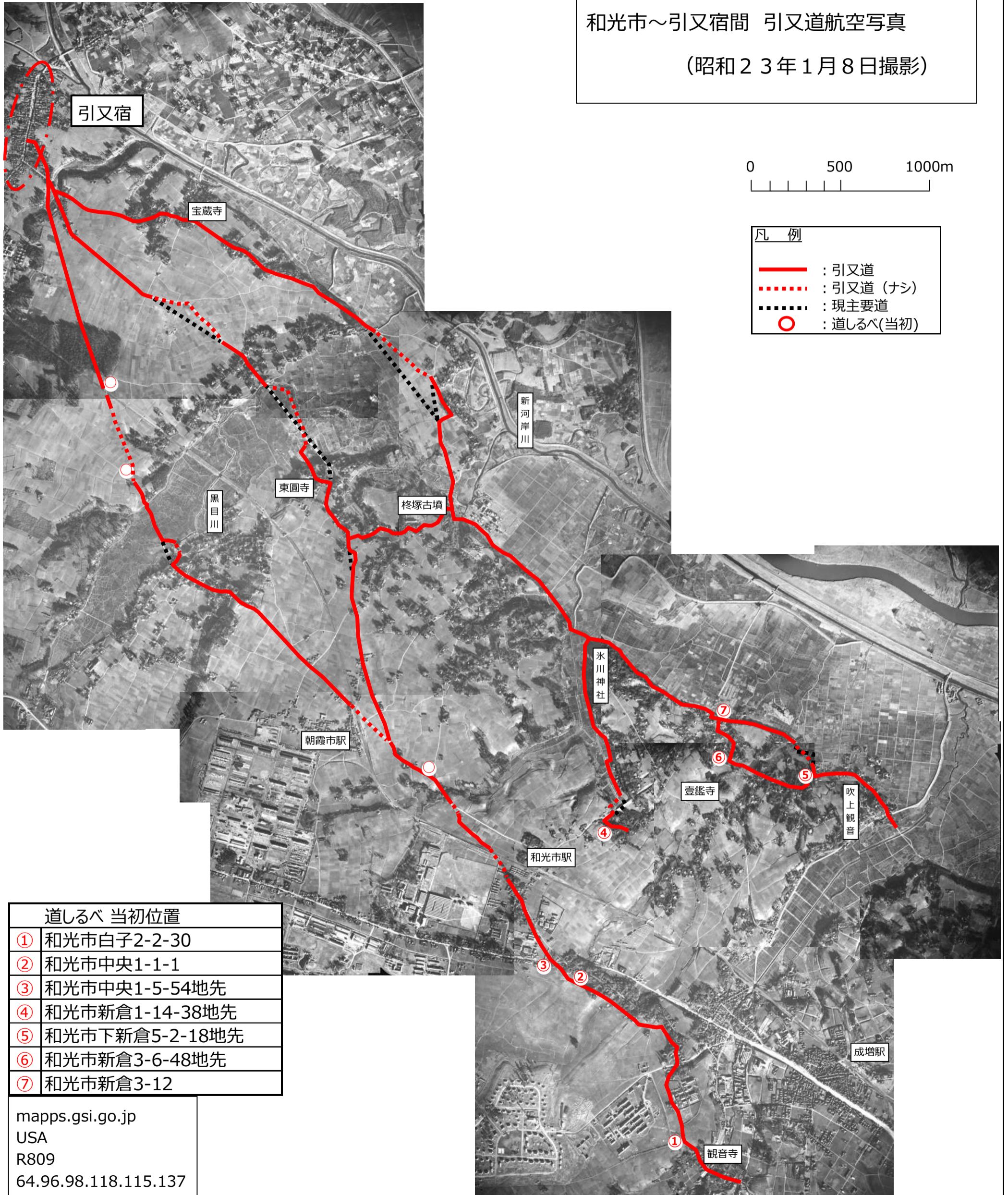
和光市～引又宿間 引又道案内図 (第2図)



和光市～引又宿間 引又道航空写真 (第3図)

和光市～引又宿間 引又道航空写真

(昭和23年1月8日撮影)



道しるべ 当初位置	
①	和光市白子2-2-30
②	和光市中央1-1-1
③	和光市中央1-5-54地先
④	和光市新倉1-14-38地先
⑤	和光市下新倉5-2-18地先
⑥	和光市新倉3-6-48地先
⑦	和光市新倉3-12

mapps.gsi.go.jp
 USA
 R809
 64.96.98.118.115.137
 1948.01.08

あとがき

1. 我々のサークルでは、平成23年6月、道しるべのある壹鑑寺において「昔の道（引又道）」をテーマとして、志木市文化財保護審議委員である井上國夫氏による現地講演を頂いた。
その際の資料の中に、ここ壹鑑寺にある道しるべについて、「浅久保の元石橋が架かっていた三叉路に造立されていたと思われるが、現在の何処に比定したらよいか、明治の迅速図を見ても確定できない。和光市の郷土史家に調査していただきたい」とありました。
2. これを機に市内全体の道しるべについて、幾度かの中断を経ながらも調査を進め、今回、第31回南公民館祭にて、市内の道しるべに加えて、市内から引又までの経路を発表することとしました。
本書は発表会資料を踏まえ、その後の若干の追記・修正をしまとめたものです。
3. 同氏による「引又道の話」の中に次の様な言葉があります。
「引又道、引又街道という名称は、交通・産業・生活の必要から自然発生的に生まれたもので、行政上名付けられたものではありません。したがって、その道筋と範囲を断定することはできませんが、道しるべ、古地図、地域の記録や伝承などによって、その実態に近付くことはできます」
今回、分からない部分が多いながらも、道しるべが元あったであろう場所および、引又宿までの経路を明示しました。
4. また、検討の過程において、新倉河岸道のうち不明とされていた、旧川越街道から上ノ郷間の経路と思われる道筋も示しました。
これは今後、新たな事実・本資料と異なる見解などが示された際に、具体的な検討・判断が可能となるように考えたものであります。

今後、随時修正を行い、本書がより史実に近い内容となり、和光市の歴史と文化を知る資料の一端となれば幸いです。

平成28年11月

和光市歴史と文化を学ぶ会

【引用した資料】

雑誌	著者姓名	発行年	表題	雑誌名	巻・号	発行者	引用頁
単行本	著者姓名	発行年	書籍名			発行所	引用頁
1	和光市	1983	和光市史 民俗編			和光市	P247 P251-254
2	釈 敬順	1916	十方庵遊歴雑記	江戸叢書	初編 巻の下 巻の3 第65	江戸叢書刊行会	P429
3	芳賀 善次郎	1984	武蔵古道 ロマンの旅			星野 和央(さきたま出版会)	P6 P127-145
4	志木市郷土史研究会	2011	郷土志木		第40号	志木市郷土史研究会	P57-62
5	和光市坂下公民館	1983	にいくら さかした 暮らしのあゆみ			和光市坂下公民館	P168 P176
6	和光市史編さん室	1984	和光市史 史料編3			和光市	P97
7	大和町教育委員会	1969	大和町のむかし 石仏			大和町教育委員会	P44-48
8	和光市史編さん室	1980	上新倉の民俗			和光市史編さん室	P118-119 P125-126
9	和光市史編さん室	1981	下新倉の民俗			和光市史編さん室	P12 P1558-162
10	和光市坂下公民館	1993	西本村 東本村 吹上 暮らしのあゆみ			和光市坂下公民館	P158-159
11	下新倉氷川八幡神社	2008	下新倉氷川八幡神社史			下新倉氷川八幡神社	P135
12	埼玉県歴史教育者協議会 和光支部	1978	和光市歴史豆事典		連載(1978.8.7)	埼玉新聞	—
13	—	2011	ふるさと和光さんぽ	広報わこう	2012.1	和光市	—
14	練馬郷土史研究会	1977	練馬区の歴史			中村安孝	P204
15	朝霞市博物館	2011	鷹狩りと朝霞			朝霞市博物館	P11
16	朝霞市教育委員会市史編さん室	1994	朝霞の石造物(Ⅲ)			朝霞市教育委員会市史編さん室	P226
17	朝霞市郷土史研究会	1988	郷土史朝霞		2	朝霞市郷土史研究会	P91-96
18	斉藤 幸孝	1974	郊外間見祿 享	江戸地誌叢書	巻7	酒井節雄	P165-172
19	和光市教育委員会	2004	文化財をたずねて			和光市教育委員会	P65
20	—	1968	文化財シリーズ	広報やまと	縮刷版Ⅱ	大和町	P199